厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
分担研究報告書

Value-based medicineの推進に向けた循環器病の疾患管理システムの構築に関する研究

研究分担者 泉　知里　国立循環器病研究センター心不全・移植部門　部門長
野口暉夫　国立循環器病研究センター　副院長
山本展誉　宮崎県立延岡病院循環器内科　主任部長

研究要旨
重症心不全患者における在宅診療と病院との連携構築を目指した、実態調査を行った。在宅治療を希望した患者のうち約半数しか在宅治療がかなわなかった。患者や家族が望む在宅強心剤静注療法の実現には、多職種連携による多面的疾患管理が必須である。

A．研究目的

本研究の目的は、重症心不全患者への多職種連携による多面的疾患管理の実態と問題点を調査することである。

B．研究方法

2019 年 7 月から 2022 年 3 月に、国立循環器病研究センター緩和ケアチームにコンサルトがあった入院患者 310 例中、静注強心薬離脱が困難な 73 例を対象に、その後の経過と、在宅強心剤静注療法を導入できた症例の特徴などを検討した。

C．研究結果

73 例中、在宅強心剤静注療法に移行できた症例は 16 例（22%）で、基礎疾患としては非虚血性心筋症の症例が多かった。また、本人と家族または介護者が、入院時より療養の場に対する希望を表明している、本人と家族または介護者の療養場所の希望が一致している症例が多かった。在宅治療を希望した患者は 30 例であったが、そのうち約半数しか在宅治療がかなわなかった。

D．考察

往診医の調整、訪問看護ステーションの選定と連携、在宅サービスの検討、ケアマネージャーとの連携、介護者への教育、食事や内服薬の見直しに関する栄養士や薬剤師のかかわり、患者・家族の気持ちの揺れに対する臨床心理師や看護師のサポートなど多職種連携による多面的疾患管理のもと初めて、在宅強心剤静注療法が可能になると考えられた。また、在宅での看取りに関しても、いざ急変時には、家族がパニックになり救急車で搬送してしまうなどの急変時の対応や、投与ルート・ポンプの問題など、さまざまな問題点が残されていた。

E．結論

患者や家族が望む在宅強心剤静注療法の実現には、多職種連携による多面的疾患管理が必須であり、多くの問題を抱えている。

F．健康危険情報

（総括研究報告書にまとめて記入）

G．研究発表

１．論文発表：なし

２．学会発表：２件

・第 26 回日本心不全学会シンポジウム
終末期心不全患者に対する在宅静注強心薬療法の普及における問題点
森内 健史，中川 頌子，小田 亮介，河野由枝，庵地 雄太，新井 真理奈，青木 竜男，疇地 道代，北井 豪，高田 弥寿子，

野口 暉夫，泉 知里

・第 70 回日本心臓病学会パネルディスカッション

希少疾患であるファブリー病の多領域連携(在宅医療～病院間における幅広い連携の構築)

中川 頌子，天野 雅史，入江 勇旗，森内健史，岡田 厚，北井 豪，天木 誠，神﨑秀明，泉 知里

H．知的財産権の出願・登録状況

１．特許取得：なし

２．実用新案登録：なし

３．その他：なし